エレクティブクラークシップ感想

131052 佐藤 理亮

僕は 1 ～ 3 月のエレクティブクラークシップのうち、1/2 ～ 1/29 の 1 ヶ月間をシドニー大学の Royal North Shoere Hospital の整形外科で、2/9 ～ 2/19 の 2 週間を都立駒込病院感染症内科で、2/24 ～ 3/10 の 2 週間を Leicester 大学の循環器内科で勉強させてもらいました。とても楽しく非常に充実した時間でした。

⑴ シドニー大学

① 事前準備

シドニー大学のホームページから申し込みをします。今年はもう 5 月ごろには申し込みができるようになっていました。シドニー大学の申し込みの書類自体は他の人が書いている通りだと思うので詳しくは書きません。結局僕は TOEFL で必要な 88 点を取るのがとても遅くてしまい大変でした。恥ずかしいのですが後輩の参考のために言っておくと僕は 4 回も受けて、58 → 72 → 84 → 95 のように点数が上がってきました。最初の一回は思いっきり遅刻して行ったので 2 回目からを参考にしてくれればいいと思います。結局は 95 点まで取れたのですが、取れたのが 8 月だったので申し込みとしてはかなりギリギリになりました。後輩の皆さんはできるなら夏前にはとっておいたほうがいいと思います。

僕は始めは推薦で出すつもりではなかったのですが、出したのが一番最後だったので、国際交流室の丸山先生が推薦を余っているということで気を利かせて推薦扱いにしてくださいました。おかげで授業料を払う必要がなく、早めに出した人より得をしてしまいました。個人応募をする方も一度確認してみると良いでしょう。

僕は同期の友人と同じ部屋で一緒に 1 ヶ月生活しましたが、初の海外だったので色々と安心でした。

② 実習及び現地での生活

基本的に実習はどの科も午後 5 時までには終わります。シドニーではサマータイムの影響もあって午後 8 時までくらいは明るいので実習が終わった後や休日は観光に行けます。実習先の先生方も「お前の今日の仕事はビーチにいってサーフィンをすることだ！」くらいのノリで是非シドニーを楽しんでほしいという感じでした。(少なくとも整形外科では、ですが。) 観光については細かくは書きませんが、シドニーは 1 ヶ月の期間で十分回りきれるくらいの街だったと思います。

生活面でいうと物価は日本より高いです。飲食費も日本よりはかかると思ってください。特になぜか飲み物は日本より全然高かったです。オーストラリアでは近年物価の上昇が激しく、昔の 5 ドルステーキも今では 8 ～ 10 ドルにまでなってしまっています。ただ、食べ物はその分量も結構あり、また個人的には美味しいものが多かったと思います。僕は自炊はしませんでしたが、なかなか野菜を食べる機会がなくなってしまうので、自炊で補うのが良かったかもしれません。

さて、一番大事な実習内容ですが、僕は整形外科だったのでとにかく手術の見学がありました。出会った全ての手術を書き留めておいたのですが、1 ヶ月で 44 件のオペを見学してそのうち 25 件に術野参加しました。(英語で術野参加は scrub in と言います。手洗いのことです。初めて術野参加しろと言われた時、この意味がわからなくて困りました。) 第 1 週は 1 件だけでしたが、2 週目は半分程度、3,4 週目はほぼ全部のオペに術野参加したのですが、同じくだんだん参加しているうちに手技もやらせてもらえるようになりました。日本では考えられないことだと思いますが、例えば 4 週目には、もちろんドクターの厳格な立会い指導のもとではありますが、足の骨折の固定をほとんどやらせてもらいました。

日本でも場所によって同じようなところもあるかもしれませんが、僕が見た整形外科はとにかく外傷が多く、中には本当に程度のひどいようなものもありました。僕は英語力に自信がなかったので外科ならまあ内科よりは英語に苦労することはないだろうという消極的な理由で整形外科にしましたが、結果的には整形外科はかなりエキサイティングな面白い体験ができる場であったと思います。

⑵ 都立駒込病院実習

都立駒込病院の感染症内科で 2 週間お世話になりました。駒込病院は感染症と腫瘍内科で有名で、感染症内科では特に HIV の患者さんが多いのが特徴的でした。先生方も大変指導熱心な先生が多く、2 週間ですが毎日色々なことを学べました。自分は HIV の molecular なことに興味があったのですが、この機会に実際に臨床的に HIV の患者さんに触れる機会をいただけたことは本当に自分にとって大きなことだったと思います。

⑶ レスター大学

① 事前準備

レスター大学 Glenfield 病院の循環器内科教授をされている鈴木亨先生から国際交流室にお誘いがあったのがきっかけでした。先生から直接お話しをお伺いしたところ、本当に偶然このような機会があったというだけで、今後毎年応募があるかどうかもわからないということでした。elective として日本人の学生がレスター大学を訪れるのは初めてのことらしく、先生の方でも手探りで色々と骨を折っていただいてやっと実際に留学することができました。手続きとしてほとんどはシドニー大学の方と同じでした。

イギリスという国は全く日本と医療制度が異なります。僕はたまたま機会がありイギリスで elective を行うことができましたが、それでも外来見学や病棟見学、基礎研究の見学などのみで手技や実際の OSCE のようなことはできませんでした。イギリスには日本のような医師国家試験などはなく、大学の授業を受け大学の試験に合格することがそのまま医師になる条件だそうです。その後 1 年間の研修が終わった時点でようやく医師としてのライセンスが発行されます。ですので、かなり厳密に大学の授業や臨床実習のカリキュラムが決められており、elective のように急に海外の学生が来て授業や臨床に参加できるというものではないということです。ちなみに、日本の大学を卒業したものが臨床医としてイギリスで勤務するには PLAB というテストを受け、さらに臨床実習の受けいれを行ってくれる病院を探さないといけません。アメリカの USMLE に対応していると思います。

なお、イギリスの医療制度は複雑であり、まず患者は GP と言われる家庭医を受診します。その後 GP の判断で大手の病院に紹介が行われそちらで診察を受けることになります。いわゆる日本的な開業医とその他雇われの医師の関係のように思われるかもしれませんが、GP とその他では資格そのものが違い、GP は専門医としての資格は持てません。さらに言えば、日本では望めば基本的に時間をかければ誰でも専門医資格を取得できるシステムですが、イギリスでは ODTS という専門医制度があり、これはそもそもこの専門医をとることのできるプログラムに応募できる人数を大きく制限しています。つまり専門医資格を持つためには大きな競争に勝つ必要があるということであり、実際に、GP でもなく専門医でもないという医者が非常に多く存在しています。まず、以上のようにシステムそのものが大きく日本とは離れているということをわかっておくといいと思います。

② 実習及び現地での生活

実習は先ほども触れましたが、ほとんどが見学の時間でした。鈴木先生には本当に大変お世話になりましたが、鈴木先生からは「イギリスも日本も医療先進国であるのだから、やっている医療はすべて世界的に最先端のものをやっているし、臨床的には同じことをしているので、君がイギリスでの elective で見るべきなのは、実際の手技や知識ではなく、イギリスの医療というものがどのようなものであるかを見てほしいのだ。」というふうに言っていただきました。実際に 2 週間滞在して雰囲気だけはつかめたように思います。

現地での生活ですが、本当に心から充実した楽しい 2 週間でした。こちらも鈴木先生や、もう一人そちらでお仕事をされている高岡先生という日本人の先生に色々な場所に連れて行っていただいたり、ご馳走になったりをさせていただきました。イギリスは物価そのものはオーストラリアよりもさらに高いのかもしれませんが、生活用品などはそこまで高くはなく、実際そこまで金銭面で気にはなりませんでした。ただ、ロンドンからレスターまでの電車料金は 10000 円近くするので、電車は高いと思っておいたほうが良いと思います。あとはせっかくレスターに行ったので、プレミアリーグのレスターシティの試合を見に行きましたが、運よく日本代表の岡崎慎司選手と写真を撮ることができたのが本当にいい思い出になりました。

elective を行うということではイギリスは何かとシステム上窮屈な場所だったのかもしれませんが、実際に現地で生活するということに関しては本当に楽しいことがたくさんの、とてもエキゾチックな場所だったと思います。